

日蓮大聖人御書全集

しゆくんににゆうしほうもんめんよどうざいじ

主君耳入此法門免与同罪事

よどうざい

まぬか

こと

（与同罪を免るるの事）

しゅくんににゆうしほうもんめんようどうざいじ
よどうざい
まぬか
こと

主君耳入此法門免与同罪事（与同罪を免るるの事）

ぶんえい ねん がつ にち さい しじようきんご

文永11年（'74）9月26日 53歳 四条金吾

ぜににかんもん た お

銭二貫文、給び畢わんぬ。

うじよう だいいち たから いのち 過 うば もの かなら

有情の第一の財は、命にはすぎず。これを奪う者は、必

さんず お りんおう じゅうぜん はじ ふせつしよう

ず三途に墮つ。しかれば、輪王は十善の始めには不殺生。

ほとけ しょうじようきよう はじ ごかい はじ ふせつしよう

仏の小乗経の始めには五戒、その始めには不殺生。

だいじよう ぼんもうきよう じゅうじゅうごん はじ ふせつしよう ほけきよう

大乘の梵網経の十重禁の始めには不殺生。法華経の

じゅうりようほん しゃかによらい ふせつしようかい くどく あ そうろうほん

寿量品は釈迦如来の不殺生戒の功德に当たって候品ぞ

せつしよう もの さんぜ しよぶつ

かし。されば、殺生をなす者は三世の諸仏にすてられ、六
ろく

よくてん

まも

よし

せけん

がくしや

し

欲天もこれを守ることなし。この由は世間の学者も知れり。

にちれん

粗

々

こころえ

そうろう

日蓮もあらあら意得て候。

せつしよう

しさい

か

ころ

もの

とが

きようじゅう

ただし、殺生に子細あり。彼の殺さるる者の失に軽重

わ

ふぼ

しゅくん

わ

ししよう

ころ

もの

返

がい

あり。我が父母・主君・我が師匠を殺せる者をかえりて害せ

おな

罪

じゅうざい

きようざい

ば、同じつみなれども、重罪かえりて軽罪となるべし。

せけん

がくしやし

ほけきよう

おん

これ世間の学者知れるところなり。ただし、法華經の御

敵

だいじだいひ

ぼさつ

くよう

かなら

むけんじごく

かたきをば、大慈大悲の菩薩も、供養すれば必ず無間地獄

お

ぎぎやく

ざいにん

かれ

あだ

かなら

にんてん

しよう

う

に墮つ。五逆の罪人も、彼を怨とすれば必ず人天に生を受

せんよこくおう

うとくこくおう

ごひやく

むりよう

ほけきよう

く。仙予国王・有徳国王は、五百・無量の法華經のかたき

う いま しやかぶつ 成 たも みでし かしよう あなん
を打つて、今は釈迦仏となり給う。その御弟子、迦葉・阿難・

しやりほつ もくれんとう むりよう けんぞく か とき さき か じん

舍利弗・目連等の無量の眷属は、彼の時に先を懸け、陣を

ころ がい ずいき

やぶり、あるいは殺し、あるいは害し、あるいは随喜せし

ひとびと かくとくびく かしようぶつ か とき おうおう すす

人々なり。覺徳比丘は迦葉仏なり。彼の時にこの王々を勧め

ほけきよう ふぼ しゆくせ ほんぎやく もの

て、法華經のかたきをば父母の宿世の叛逆の者のごとくせ

だいじだいひ ほけきよう ぎようじや

し大慈大悲の法華經の行者なり。

いま よ か よ あ こくしゆ にちれん もう もち

今の世は彼の世に当たれり。国主、日蓮が申すことを用い

かれ かけ

るならば、彼がごとくなるべきに、用いざる上、かえりて彼

方 人 いっこく 挙 にちれん 返 責 かみ

がかとうどとなり、一国こそりて日蓮をかえりてせむ。上

いちにん

しもばんみん

みな

ごぎやく

す

ほうぼう

一人より下万民にいたるまで、皆、五逆に過ぎたる謗法の

ひと

おのおの

かれ

かた

こころ

にちれん

どうい

人となりぬ。されば、各々も彼が方ぞかし。心は日蓮に同意

み

べつ

よどうざい

脱

おんこと

そうろう

なれども、身は別なれば与同罪のがれがたきの御事に候に、

しゆくん

ほうもん

みみ

触

まい

主君にこの法門を耳にふれさせ進らせけるこそ、ありがたく

そうら

いま

おんもち

との

おんとか

のが

たま

候え。今は御用いなくもあれ、殿の御失は脱れ給いぬ。こ

のち

くち

慎

てん

いちじようとの

れより後には口をつつみておわすべし。また天も一定殿を

まも

たも

もう

ば守らせ給うらん。これよりも申すなり。

構

構

ごようじんそうろう

憎

ひとびと

かまえてかまえて御用心候べし。いよいよにくむ人々

狙

そうろう

おん酒盛

よる

いつこう

とど

たま

ねらい候らん。御さかもり、夜は一向に止め給え。ただ

にようぼう

さけ打

の

ごふそく

たにん

昼

女房と酒うち飲んで、なにの御不足あるべき。他人のひるの

おん

懈

さけ

はな

隙

あ

御さかもり、おこたるべからず。酒を離れてねらうひま有る

かえ

がえ

きようきようきんげん

べからず。返す返す。恐々謹言。

くがつにじゅうろくにち

九月二十六日

にちれん

かおう

日蓮

花押

さえものじようどのごへんじ

左衛門尉殿御返事